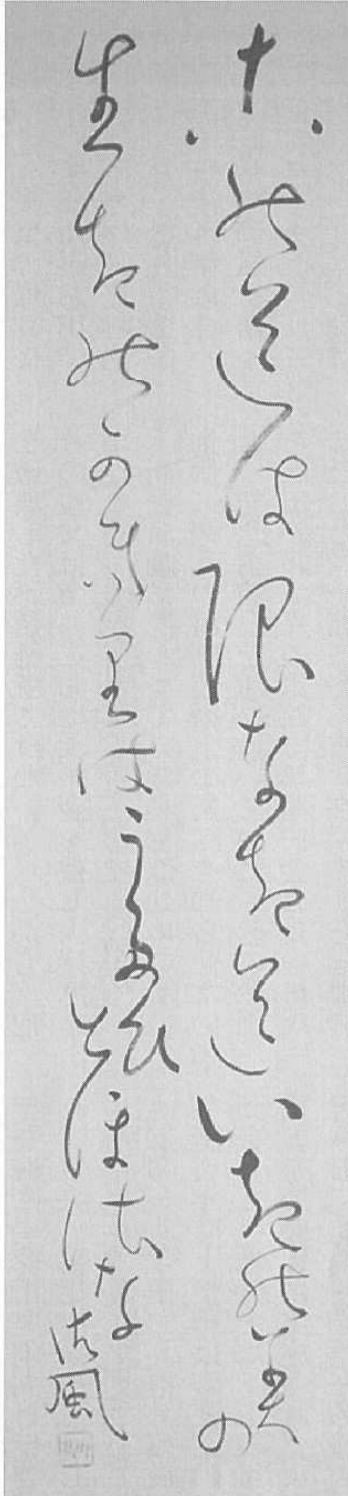


# 生心

せんしん

30号 2020年5月8日



寄稿

## 糸魚川と御風への強い想い

岩町 功



金子善八郎理事と岩町さん(右)

「東京の帰りに糸魚川へお出で下さい。島村抱月・松井須磨子歿後百年に合わせて御風を語って下さい」。二〇一八年八月、糸魚川市教育委員会の榎正喜さんからお電話を戴いた。即座に行きます、とご返事した。

糸魚川と御風に強い想いがあるからだ。浜田市出身の抱月を生涯の研究課題としている小生には、抱月の門下生で彼を最も理解・評価していた御風は抱月と共に大切な人だ。

今一つ糸魚川に深い想いがあるのは、一九九六年五月、相馬文字さんに声をかけて戴いて御風忌に参加した時の情景である。法要の中で、御風が育てた歌会の皆さまの献詠に深い感銘を受けた。御風は生きています！糸魚川の人々の心の中に今もしっかりと生き続けているのではないか。それに引き換え我が抱月の故郷はどうだ。寂しい限りであった。

というのは、一九七一年抱月生誕百年の浜田の対応を想起したからだ。当時小生は地元

の高校に勤務していた。旧知の市議会議員数名に抱月生誕百年記念の文化行事の開催をお願いした。と、君、何を言うか、教育者ならもつとしゃんとしろ。大学教授が女優に惚れて芝居にうつつを抜かし、あげくの果て家庭を破壊した不道德者ではないか。しかも、抱月の親父はあちこちに大借金を残し大迷惑をかけた。そんな男を公金で顕彰するのか。

高校演劇に携わっていた小生はせめて若い世代に抱月の演劇芸術上の業績を知らせたいと、記念講演会を想い描いていた。その企画を浜田の経済界の重鎮で早稲田会会長のH氏に話した。一緒にやろう。在学中から同郷の先輩として敬愛していた、と快諾。講師は抱月研究の第一人者、俳優座の松本克平さん。講演は同年初、地元で実現した。

その夜克平さんはしみじみと述べられた。初舞台以来四十年、「民衆演劇の確立と新劇職業化(芝居で飯が食える)」に努めてきたが、「抱月の藝術座五年の業績」の足元にも及ばない。岩町君、これからだよ、我々の仕事は、業半ばで倒れた抱月の演劇への熱い思いを受け継いで行こう。

小生は、先ず高校演劇の質的向上を目指し、中央で活躍している島根出身の演劇人を招き親しく指導を受けた。その結果島根の高校演劇は飛躍的に発展し、中国地方代表として全国大会へ出場する力を付けてきた。

校長退職後、浜田市の石央文化ホール館長、続いて顧問を命じられて今日に到る。地域住

民による舞台芸術創造こそ抱月の故郷で発信すべき事業だと考え、今年までの三十年、地元取材した住民参加創作ミュージカルを地域の文化力を結集して上演し続けている。

東京では二〇一三年、抱月の藝術座創立百年を機に『藝術座創立百年委員会』が結成され、以来、藝術座が拠点とした東京神楽坂を中心に顕彰運動が展開されてきた。

二〇一八年十一月抱月歿後百年を迎えると、生誕百年時と情勢は一変、睽目すべき時代が到来した。地元では、没後百年記念行事が市民の手で盛大に実施され、東京でも同年十二月八日「抱月・須磨子歿後百年」の奉納行事が須磨子の菩提寺多聞院で行われた。

その翌日糸魚川の記念行事に参加すべく、東京発九時三二分「はくたか」に乗車、所が思いもよらぬアクシデントに遭遇。軽井沢付近の架線事故のため四時間遅れて糸魚川に着、当然行事は中止されていた。この責任を果たすべく御風会にお願ひした所、昨年の御風忌に機会を与えて戴いた。近代演劇を切り拓いた抱月と御風と須磨子の辛酸の生涯を、具体的な演劇表現(舞台形象化)の歴史も加えて語り伝ようと努めた。

思えば、没後百年にして、抱月はやっと故郷に迎えられ、神楽坂や糸魚川にも甦った。だが、泉下の克平さんは、まだまだ抱月が実現した「芝居で飯が食える」状況ではないよ、と苦言を呈されるに違いない。

(浜田市教育文化振興事業団副理事長)

# 復活唱歌—カチューシャの唄

堀口 遼

## 「復活唱歌」誕生

第一次世界大戦が火ぶたを切った大正三年(1914)三月二十六日に帝国劇場でトルストイ原作「復活」が上演された。坪内逍遙の文芸協会を離れ独立した島村抱月が組織した芸術座の、看板女優松井須磨子が「復活」の劇中において一幕、四幕、二回歌った。それまでにはない新しい歌は、旧制高校生や大学生、当時のインテリ層に広まり演歌師によって全国に大流行をした。

「復活唱歌」は一番が島村抱月、二番以降を相馬御風が作詞した。当時島村抱月は脚本、演出と多忙であり、二番以降を相馬御風に依頼したものと思われる。レコードには五番までであるが十番まで御風は作詞している。これは、抱月の推敲を予定したか、いかなる場面に於いても松井須磨子が歌えるように準備したのではないかと思われる。

また作曲は新人の中山晋平が行いこれが彼の処女作である。中山晋平は当時、東京音楽学校を出たばかりで島村抱月の書生をしていた。抱月は晋平に「西洋音楽と日本の小唄の間を狙ってほしい」と注文を付けたと言われている。

三月二十六日からの帝劇の上演は大成功で千秋楽を迎えた。廊下に張られた歌詞をメモする人たちが廊下にあふれ、身動きが出来ず

歩けないくらいであった。そしてその人たちが大合唱したというから、その人気のほどがうかがえる。

## 「復活唱歌」レコードの発売

このカチューシャの唄のヒットに目を付けたのが東洋蓄音機株式会社(大正三年—一九一四年創立)のオリエント・レコードである。大正四年四月二十五日、二十六日に巡業先の京都のオリエントレコードスタジオに於いて録音されたと思われる。「復活唱歌」のタイトルで発売されると二万枚を売って、倒産寸前のオリエントレコードの会社が息を吹き返すことが出来た。

当時、国産の蓄音機が八十円で大工の一月の手間賃位と同等というのだからそうとう高額であった。蓄音機の普及台数から考えると二万枚のレコードの売上はすごい事である。レコード一枚の値段は現在の値段に換算すると一万円前後と思われる。

また当時の日本においては著作権の概念はなく、安価な半額程度の海賊版のレコードも発売された。また替え歌「花子可愛や」なども新興のレコード会社から発売され、一つの産業を産みだしたのである。

## 「復活唱歌」の影響

芸術座の演劇からは松井須磨子が劇中で歌った「ゴンドラの唄」(大正四年・作詞吉井勇)、「さすらいの唄」(大正六年・作詞北原白秋)は、いずれも作曲は中山晋平である。

「復活唱歌」により作曲、作詞家という新しい職種が生まれた。その流れは、大正七年、作家、鈴木三重吉が、その主幹する児童雑誌「赤い鳥」で起こした「童謡運動」につながっていく。当時の優れた詩人であった北原白秋や西条八十、野口雨情そして相馬御風などが子供のための詩を作り、中山晋平、本居長世、弘田龍太郎、山田耕筰、成田為三などが曲を作った。今もなお多くの歌が歌い継がれている。「春よ来い」(大正十二年・相馬御風作詞、弘田龍太郎作曲)は今も愛唱される一曲である。相馬御風の作詞は、校歌二〇八校、童謡百四十曲、歌謡八十八曲、新民謡三十曲、国歌・社歌四十一曲、邦楽七曲、国民歌謡七十七曲と多くを数える。



松井須磨子のカチューシャ

## \*参考文献

相馬御風記念館資料  
「蓄音機の歴史」梅田晴夫

『相馬御風書簡集』にみる  
戦中、戦後の糸魚川

金子 善八郎

一、  
糸魚川市教育委員会は、平成二十六年(二〇一四)三月、『相馬御風書簡集上―家族への書簡―』を出版した。そこに、大学へ進学して上京した娘文子に宛てた御風の書簡、二百六十六通が収載されている。昭和十二年(一九三七)から昭和二十五年(一九五〇)までのもので、そこには日中戦争から太平洋戦争の敗戦までの、公的記録に見えない糸魚川の「銃後」の様子が克明に記録されており、糸魚川の戦中、戦後の様子を知る上で得がたい資料になっている。

二、  
「防空演習」とか「灯火管制」と言えば、大方の人は、太平洋戦争時代、特に本土空襲が激しくなった時代のことと思っている。しかし、実際は、昭和十二年(一九三七)盧溝橋事件で日中戦争が始まった直後から実施されている。

この時御風は  
・防空演習の無灯火の暗にうずくまり  
もだしてあれば驚鳴き過ぎぬ  
・かかることまでせねばならざるこれの  
世に生きて遇はむとかねておもひきや  
と詠み、演習の強制に反撥している。米軍機

が日本の本土を空襲したのは、太平洋戦争中の昭和十七年(一九四二)四月一八日のことであり、日中戦争当時は、中国軍に空襲される恐れはほとんどなかった。にもかかわらず「演習」を開始したのは、「挙国一致」の戦時体制を早急につくり上げるためであった。三年前には、町の「防護団」が組織され、この年四月五日には「防空法」が公布され、九月三日には、糸魚川警察署前の鐘楼に防空監視哨が設置されている。

また御風も「事件以来世間の様子がすつかり変り、自分の気持ちも変わつてゐる。かかる時、国を憂うる心は、私の如き隠者の胸も燃えずにはゐない」といつて態度を変える。これを契機に戦時体制が急速に強化され、御風も、県知事から「国民精神総動員新潟県委員」に任命され、「挙国一致」の大波に呑み込まれていく。

開戦二か月後の九月二十日、「糸魚川でもはじめて戦死者があつた。大同の戦でだ。」そして「こちらは昨今猛烈に停車場で万歳万歳万歳だ」「今も豪雨の中山から兵隊さん送りの一群が『天に代わりて』を、声からしながらビシヨ濡れになつて外を通つて行く涙ぐましい光景だ。』―急に召集が多くなり、出征兵士歓送も日常のことになつていく。

昭和十二年十月十五日付。  
「糸魚川からだけでも百二三十人出征してゐる」「糸魚川の青年は急にめつきり減つた」  
「丸ごと動員」されたのである。

昭和十二年十一月三日付。

「糸魚川の出征者二百余人、一戸から三人ヲ出シテ居る家二、二人を出してキル家三、戦死三(負傷不明)。」

こうした中で御風は、コメをとぐときに一握りのコメを国に献納するという「一握報国の提唱」をする。そのことが御風の「新な銃後運動」として新聞に大きく報道され大きな反響を呼んだ。そして御風は、県知事から「国民精神総動員新潟県委員」に任命される。

そして、この年の十四日、出征兵士家族、戦死した遺家族を慰安するため「郡内八ヶ校が集まつて相馬御風作歌演奏会」が糸魚川小学校の大講堂で開かれた。「聴衆四千人」という大盛会であった。

そうした中でまた急に召集が多くなる。「又おほぜいの召集が来て此の二三日ゴツタ返してゐる」「今日はお祭りだが、今日から防空演習だ。今度は三十日まで一週間だ。」「お祭りどころでなくなる」(昭和一四、十一、一三)。こうした中で御風は「社会教育功労者として文部大臣よりの表彰」を受ける。「大変な表彰状の文句だ。あまり数例がないと思ふ」と。

## 三、

昭和十六年十二月八日、日本は米英両国に宣戦布告。「いよいよ時が来た。昨日宣戦のご詔勅を拝して父は泣いた。皆が互いにしつかりと覚悟きめて如何なる困難にも打ち克つて大君の御為一筋に進まねばならぬ時が来た」。

翌十七年一月一日、まず塩が、「通帳支配給」になり、二月二十一日「食糧管理法」公布、

味噌醬油、衣料も切符制になる。そして、五月には早くも「金属回収令」により、寺院の仏具、梵鐘などの供出が強制される。町はチブスが蔓延して強制健康診断、予防注射で大騒ぎになる。チブスは翌年一月にも流行った。

昭和十八年になると戦況が悪化し、それともない、「根こそぎ動員」となり、中学生の海軍への志願が奨められた。御風は「一昨日は中学校の海軍兵学校入学者四名甲種飛行学生合格者二十八人の壮行式に列し、大いに激励の辞を述べた」という。

さらに昭和十九年に入ると「中学校も一ヶ年授業を停止して全員工場労働に動員される」倉若も「青海電化へ勤労奉仕に」行かなければならなくなった。

翌年七月、追い打ちをかけるように谷々村々の河川が洪水となり大きな被害がでる。そして八月、またしても大火事が起きる。用意していた沢山の木炭を焼失してしまつて、越冬が危ぶまれる事態となる。

そうした町へ、多数の疎開者が押し寄せて来る。集団学童疎開の三百余名は、町と根知村の寺院へ分散収容された。御風宅へも小学生の萬里子さんが単身疎開して来た。テル夫人の従兄の未亡人一家も疎開して来た。浅川一家も浜町の納屋を借りて住むことになった。町はこうした数千人もの「縁故疎開者」でいっぱいになったという。そのため、食糧が極度に不足して、町は、窮地に陥ることになる。

さらに、戦況の悪化とともに、出征する人も増え、戦死者も多くなる。「明日五柱の町葬

がある」二十九日夜はこちらも眠らずに明かした。二回目の警報の時には倉若に命じて近所の電灯を消させに廻らせた。(昭和十九、八、二九)。

#### 四、

そして終戦。しかし、この時の手紙は残っていない。正確な事は分からないが、この時、文子は帰省していたのかもしれない。

御風の文子宛て、戦後最初の手紙は、昭和二十年十一月二十九日付。

「今日は蕪菜採りで、倉若は終日畑に行つてみた。自由販売になつてから野菜も魚類も何もかも驚くべきたかねとなつた。米は一石千五百円以上、フクラゲ一尾十円、蕪菜一束十円、大根一本二円、甘藷一貫目二十円といふものすごい値だ」。

「糸魚川にも盛にヂープがやつて来る。直江津あたりでも日本の娘が米兵と腕を組んで白昼盛に歩くことになつたといふ。糸魚川でさへヂープに婦人が一しよに乗り歩くほどになつた。糸魚川からも多くの娘たちが接待婦やら何やらに高田、直江津、新潟あたりへ行くやうになつた」。この「何やら」は、売春婦のことだといふ。

昭和二十一年一月四日、GHQが「公職追放」を実施し、御風の幼友達、中村又七郎(初代糸魚川市長)も追放された。

この年、二月十七日には食糧緊急措置令が発令され、農家の「供出」が強制された。ま

た、「金融緊急措置令」によって新円が発行され、旧円預貯金は封鎖、経済の混乱が、戦前よりもひどくなった。

昭和二十一年三月一日付。

「金のことは全たく困つた。こちらも今日やつと父百円、倉若名義で百円代へて貰えるだけ」。「深沢さんに継るか、学校にたのんで月給の前借でもして一時を凌げ」。

こうした中で、発疹チブスや天然痘が、富山ではコレラが流行した。そして停電が頻繁に起こり、猛吹雪で列車の事情が悪化して、新潟から糸魚川まで四日もかかるという事態になった。

また、昭和二十三年六月十八日には「九日付の文子の手紙検閲でおくれて今日(十八日)漸く着いた」二十四日付の文子の手紙検閲が遅れたと見え今三十日漸く着いた(昭和二三、六、一八)と「検閲」のことに触れている。

GHQの郵便検閲は、終戦直後の十月一日の指令により始まるが、手紙に書かれるのはこの時が初めてである。なぜそんなに遅れたのか、その理由が分からない。なお、ここは、文子の手紙のことだが、御風の手紙は最初から検閲されている。

町に、ようやく、明るい兆しが見え始めたのは、昭和二十三年の秋になつてからである。「町の両側に久しぶりで紅白のホボツキ提灯がつるされ青竹が立てられた。人心が著しく平和になり落ち着いてきたようだ(昭和二四、一、二七)。

## 相馬御風の励ましを糧にした

## 伝川白道子

岡村 鉄琴

私事ながら自分が居住する旧西蒲原郡西川町(現新潟市西蒲区)が、これまでなかった『町史』に代わる郷土読本の編集に取り組み、監修及び執筆の任に当たった。内容について文芸面で八人の画家の輩出を記録出来たのは、旧郡内における大きな特色と捉えよう。

この八人中に相馬御風と接点のある画家・伝川白道子(一八八八〜一九六三)が見出された。両者の関係を思わせる資料紹介を交え、小稿をまとめた。

明治期画家を志し、地方から中央画壇での活動をすべく上京した人は少なくない。名家に師事して一定期間大規模展での出品履歴を持ちつつも、今日生地ですら実績を見出せない地方文人が大勢いる。白道子もその一人だった。

本名は喜三(きみいち)。別号幽外、克。明治十七年旧西川町天竺堂の農家に生まれ、好きな画道に傾倒して同じ越人の尾竹竹坡に師事するも三度の破門を受けたと自弁記述にある。のち東京から大阪、信州へ転住。

昭和十五年、御風が白道子に推薦文を書き与える。これを用い翌年十二月、第一回個展を銀座で開催。その翌年第二回展、そして白道子の御風宛書簡によれば、それをしたためた十八年十一月に三回展が予定された。

戦後の昭和二十八年五月、武者小路實篤が、同年秋には小林存が推薦文を与え、同年八月二十五、二十九日には會津八一から葉書二枚を受信している。これら三氏の記述した文面を総合すれば、この頃、銀座三越本店を会場とする個展の準備に取り組み、それは画帖(芳名録)を持参の上に各家を訪問し面会を求めたか、熱の入ったものであった。実現したかは現在未確認。

後年西蒲原郡巻町に住むも、再度上京。最期は川崎市上作延で昭和三十八年に没した。



伝川白道子 肖像

昭和四十年に三回忌供養のため、巻町公民館で遺作展。昭和五十三年五月、古里西川中学校で回顧展。以降地域に埋没した感がある。

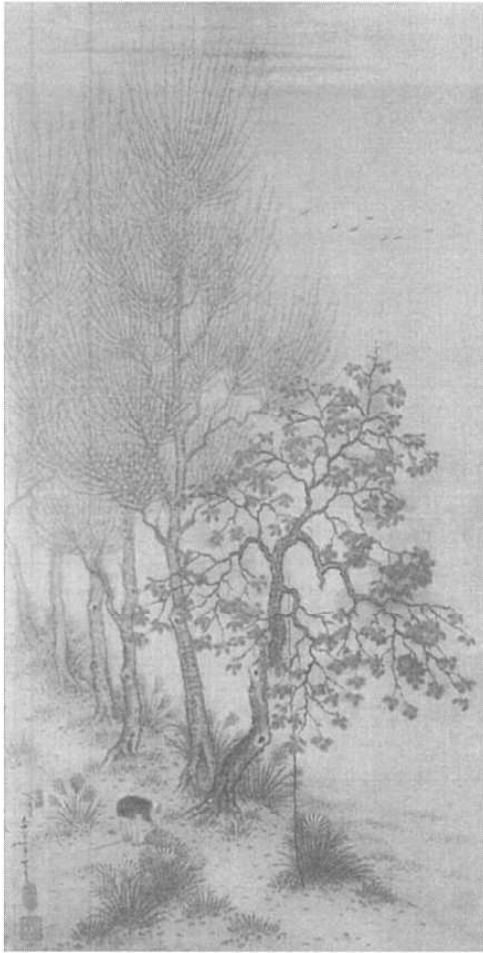
上記のような生涯の概容がつかめたのは最近のことで、詳細を「新潟大学教育学部紀要」(12巻1号・R1刊)に執筆し得たつもりである。執筆が行えたのは文中触れた御風・實篤・存・八一等が白道子に贈った資料の提供を親族から受けたおかげに他ならない。筆者が作家の存在を知った十五年以上前では、長

男の方に取材しても「糸の切れた風の如く」(談)画家を目指し上京後は、親類縁者と音信不通になったという。

ただし入手した資料は全てコピーによるもので、原物の所在は未確認に止まる。興味深いのは、コピー類からどなたか以前、白道子の調査に着手した方がおられた節がある。昭和五十四年七月十八日付歴史入館券の付いた御風宛白道子封書便(S18・4・22付)コピーには、当時伴是福氏が対応したらしく、同氏の名刺もコピーに付いている。確かめると本便は同館資料目録に整理済のものだったが、当然注目されず仕舞であったろう。

この御風宛白道子書簡は便箋六枚に及ぶペン書き長文で、糸魚川の御風を突然訪問、それ以来の御無沙汰をまず詫びる。貴重な記述としてこの年十一月八、九、十日に「例の如く銀座のギャラリー」で第三回個展を開く運びとなり、題材は全て武蔵野を描く。そのために原野を歩き回っていると御風に伝えていく。また画家を志す三条市の大湊氏なる人物を御風が白道子に紹介していたらしく、対して白道子は大湊氏の将来性を賞讃している。通読するとどこか御風の心の琴線に触れる、御風が好みそうなタイプの白道子像が、手紙文面から浮かび上がってこよう。長目に引用してみる。

此頃は漸く気を取り直し一切を精算して大死一番力強い更生の新らしい第一歩を印す



心の古里 白道子作

る覚悟で元氣一杯大地を踏みしめて雄々しく立ち上りたい欲求がをさへ切れない潮の如くに湧き上つて来るのをひし／＼と身に感じ何とはなしに胸の引き締まるやうな思ひがいたします。：また此のたびは先生御昵懇の大湊吉平氏を御紹介下され：ただ一筋に御互ひに好きな風雅の道に遊ぶ心で向上の一路を辿り共に楽しく手を取りあひながら心のふるさとを彼岸に求めつつ行末永く漕ぎ進み歩みをつづけて往きたいと思ひます。素よりこの道は教ゆべからざる以所(所以)の義を語り合ふより他に別の方法とてはないやうにも思はれます故、ただ各自その天分に順がひ、解衣槃礴の心境に退歩して遊戯三昧の真境地に到り得るならば何時かは自然に真芸術の本道を開かれ四通八達自在に創造の力が湧き起こつて来るのではないかと私は今そのやうに考へさせられて居ます。もしも幸にしてこれからの私

の貧しい画生活の体験が少しでも大湊さんの画生活の上に他山の石となるやうなことがありましたら私にとりせめてもの喜びです。大湊さんは世間一般の画家氣質などとは凡そ懸け離れた良い素質と性格を有つて居られますから将来益々素直な研究を進めていかれたら楽(し)める人だと私は思ひますので将来期待をかけて居ます。偶然とは申しながら：動機こそ私とは異なつて居ましても宛も期を同じうして同じ心に結ばれ相共に輝かしき更生の門たる思ひもかけず道づれにならうとは宿世の因縁の然らしむる所、世の中は誠に不思議と申す外なく何れは神仏の加護かとも思はれて私はただ／＼感激して居ります。(以下略)

このやうな言葉遣いの白道子の作品についてだが、伝わる数は甚だ少なく、生地縁者の手元に残るばかりである。管見では山水風景画が主で、もや

の姿勢を貫くには、物心両面にわたり余程の覚悟を必要とする。沈潜した画筆の紙背に見える隠れする白道子の心境を、恐らくは一、二度の面会しか果たしてはいないやりとりの末、御風はいかにも御風らしい言辞を繰り出して白道子へ個展推薦文を記している。結びに全文を引用したい。

白道子の藝術

相馬御風

一たび地殻より迸り出た清泉は岩を傳ひ草かげをくぐり林に隠れ断崖を飛下しあらゆる困難と闘ひ辛酸を嘗めひそやかにつゝましく而も常に全力をつくしつゝたゞ一途進むべきに進みいつかは白日光の漲る廣野に現はれて萬人の渴を醫し萬頃の耕土を潤さずには措かない 唯獨の道をひたむきに進む人の歩みは貴い わが傳川白道子のこれまでの歩みは正にそれであつた 眞の画人らしい画人の風格を私は白道子に見た 白道子は私と同じ郷土越後に生れ育てられた人であるが白道子の画に於て北越の自然は生かされた 白道子の画には詩がある 宗教がある それは形だけの裝飾ではない生きた第二の自然である 私は白道子の藝術を魂の藝術であるといひたい きらびやかな裝飾画が街頭に氾濫する現代に於て白道子の画の如きしめやかなる画の前に獨靜に座して心を養ふ人をこそ眞の趣味人であると私はおもふ 白道子の作品は必らず近き將來に於てその眞價を天下に發揮するであらう 私はそれを信ずる

のかかつた幻想的な画面を呈す。上空に鳥が点描されたり枯木が中心であつたり、季節は秋冬景色にみえる。かつて異画会や日本南画院に所属した時代もあつたが、個展で自分の力を世に問う独歩

一たび地敷らう通らうもらん青  
 泉はつるをゆひむさあゆみさくく  
 林の隅の断崖をさふ下しあ  
 らゆる困難を胸の辛酸を考  
 めひそやふつこしそ而もた  
 かんまををつらつた二年進  
 ちよふ進みいつらは白日の

御風推薦文(部分)

御風が親切だったのか。白道子の才が御風を動かしたのか。多忙な御風が丁寧に対応したこと、よって地方の一人人が救われたことを読み取って頂ければ幸いである。

付記 近頃の活動から

- ①令和元年九月十一日から十一月十日まで良寛の里美術館特別展「糸魚川市に伝わる名品展」企画監修に当たった。「新潟大学教育学部紀要」(12巻2号・R2刊)に報告をまとめた。
- ②『没後六十年 相馬御風遺墨集』(二冊)をじっくり手に取り見返している。丁度十年が経過したがこの間、失われた作は少なくない。改めて刊行の意義を味わいつつ、節目の年に増補本上梓を目指し何度か調査を重ねてきた。機を逃さず後世に記録して伝えたいと思う。「機」とは気持ちの熱さを指す。十年前の我武者羅さがまだ我が手に残っているうちに。

(越佐文人研究会代表・新潟大学教授)

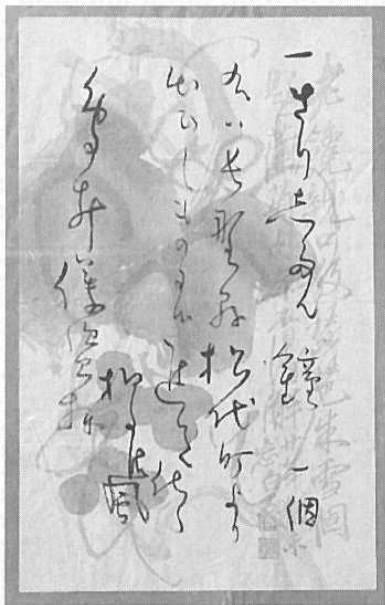
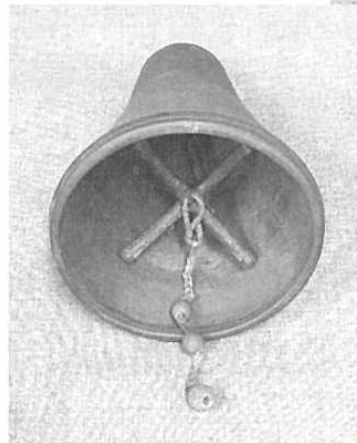
糸魚川歴史民俗資料館(相馬御風記念館)新蔵資料から



昨年度末に興味深い資料が新蔵されたということで、ここに紹介させていただきます。

御風の良寛研究を助けた出雲崎の鳥井儀資(文四郎)の旧蔵品で、小ぶりの鐘です。もともとは御風が入手し、クリスマスチャンであった儀資に贈呈したもののようです。

外側からは見えませんが、鐘を鳴らす「舌(ぜつ)」の部分の部分が十字型であるところが興味深いところです。



一 きり志多ん 鐘一個

右ハ長野県松代町より

出でしものに候 進呈仕候

相馬御風

鳥井儀資様



# 魯山人の糸魚川来訪

榎 正喜

北大路魯山人と御風はともに明治16年、それぞれ3月、7月の生まれである。

互いの仕事を新聞や雑誌、著書、伝聞で知るのみであったのだろうが、昭和13年―魯山人の良寛熱が最も高かったといわれるこの年、魯山人側から御風に急速に接近し、交流をもつことになる。

魯山人が糸魚川の御風を3回訪ねているのは周知のことであるが、何が目的であったのか、本稿ではこれを整理し、あるいは推察してみることにする。

## ○1回目の来訪

昭和13年は国家総動員法公布施行年。時代のうねりが激しい、その渦中の来訪である。

1回目は雪の日、初対面である。事前の約束はなく、旅宿の主人の案内でという。目的は御風蔵の良寛遺墨鑑賞と、世に出回る真贋不明の遺墨に対する見解を聞くこと。魯山人はコレクション一点一点に「若者のやうな喜び方で」感嘆の声をあげたという。

御風は体調が悪いなかでの面会であったが、魯山人の鑑賞法について「感受性の鋭敏さは、ビンビン私の神経に響いた」「私の思っていたところへピタリピタリとはまって来た」と記しており、二人が親しく会談し、意気投合したことがわかる。

来訪年月日

内容

出典等

昭和13(1938)年

1回目  
2月2日

良寛遺墨のうち特色あるもの15点閲覧し意見交換

随筆「珍客来訪」「身边雑記」  
〔野を歩む者〕第45号・1938・5発行

2回目  
7月20日?

来訪の目的や、どんなやり取りがあったかは不明。

昭和13年6月27日付御風宛書簡に「七月廿日お訪ね致度」と記載あり。

3回目  
8月5日

福井県三国港へウニの捕獲と製法の実地調査に行く途中での訪問。

随筆「身边雑記」  
〔野を歩む者〕第47号・1938・11発行

「今年になつて三度目の来訪を受けた。」

相馬文子さん(御風長女)の回想  
「自ら包丁携帯、糸魚川の土地で調達した鮮魚で刺身を作り、御風の食膳に供した」  
〔食の文学館〕第6号 1989)

「当地の材料をみづから買ひ集め、それを用ひて特に私の為のみづから料理して食べさせてくれた。」

丸山京子さん(実家が平安堂)の回想  
食材は横町の浜でとれたマダイ。刺し身、焼き物、吸い物、酢の物など「素材そのままの味だったと思います。野菜も地元のもの」  
(糸魚川タイムス 平成25・5・17掲載)

## ○2回目、3回目の来訪

2回目の詳細はよくわかっていない。書簡に「七月廿日お訪ね致度」とあり、御風が8月の来訪を「今年になつて三度目」としている。ようやく2回目があったとわかる程度である。

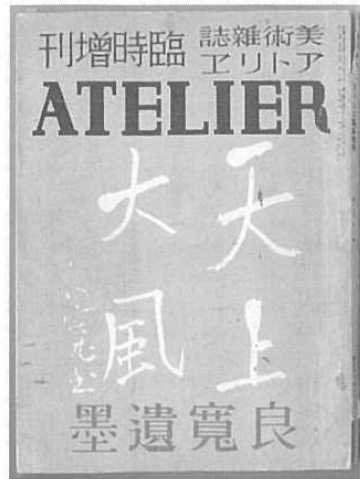
3回目も1回目と同様によく知られるところである。魯山人が御風のために料理を作ったという逸話は比較的有名だ。ここ30年程の間で関係者の証言が出てくることにより、当時のある程度の様子が分かってきた来訪である。(右表参照)

○2回目の来訪目的を推察する

―魯山人は平安堂で何を買ったのか  
糸口は魯山人から御風に宛てた書簡にある。  
まずは昭和13年6月30日付の書簡である。

啓 別送アトリエの良寛遺墨に真格、偽、  
の点を印し 御高鑑を仰ぎ申候

つまり、先に御風のもとへ雑誌アトリエ臨時増刊「良寛遺墨」を送り、それについて意見を交わすこと、これが目的の一つである。記念館に残るこの雑誌には御風の書入れがあり大変興味深い。



アトリエ臨時増刊「良寛遺墨」  
1938. 6. 15 アトリエ社

次に、遡って1回目の訪問に対する礼状である昭和13年2月8日付書簡の一節に注目したい。(以下、傍線はすべて筆者)

拝啓 この程ハあつかましく罷出御風邪之處をもちへり見ず御無心申上 良寛様御墨跡多数を拝見さして頂き愈々信仰を厚く致し申候 尚又 平安堂御心配に預り何共恐縮の次第に候

これを御縁に今後共宜敷御交誼之程願上候

そして年が変わって昭和14年1月27日付の書簡である。

御蔭様にて良寛書大巻入手相叶ひ偏に喜び居り候 大物だけに良寛様と同棲之感いたし意を強く致居候  
本年ハ東京の皆々に自慢致し度存居候  
大巻之御感想文賜り度存居候

魯山人は1回目の来訪時、骨董店で「ゲテモノをいろいろ」購入したと御風随筆「珍客来訪」で書かれ、何かしら地方芸術家の佳作を買っていったのだと筆者は想像していた。

ところが関係者の後年の証言により、魯山人は平安堂で良寛遺墨の「無類の名品」を求めていたことが判明した。御風が敢えてこのことを書かないのは当然ともいえる。次に示す引用は黒田領治(日本橋で黒田陶苑を経営・魯山人と行動を共にした)の回想である。

越後、糸魚川に平安堂といふ料理旅館・兼骨董屋がありましてね、そこに素晴らしい良寛の書があるといふ話を、相馬御風さんが魯山人の処に持込んで来ました。そこで山人は私と一緒に見に出掛けたのですが、一目それを見て山人はひっくり返る程ビックリして仕舞ひました。長さが一丈二尺、幅が四尺ほどありました。そこへ七寸ぐらみの字で漢詩と和歌を書いたものですが、良寛としては五十歳前後の、老年の良さが出て来る前期の若書きに属するものなんです、実に見事な書でした。古今東西にこ

れ以上りつばな書は見たことがない、と魯山人は大変な感激です。

ところが昭和十一年すでに星ヶ丘を追ひ出されて間もなくだったから、山人は普段百円の金も思ふにまかせなかつた頃です。それなのに……すつかりそれに惚れ込んだ山人は何うしてもコレを手に入れると言ひはりました、値を聞きますと一万円なのです。そんな大金がある筈がありません、にも拘らず遂々それを持つて帰つて来て仕舞ひました。ケチなことばかり私が気を使つてゐるやうですが、フトコロに百もない男が田舎で一万円もする物を遮二無二持つて行かうとするんですから、この終持ち去られるのではあるまいかと、御風さんなんかビックリしてゐました。無理ありません。

(中略)

金は払つた。そこで座敷の中に太い青竹を張り渡して、その向うに良寛をダーツと拡げて天下の名士を呼び、それは大盤振舞ひをしたものです。酒屋の払ひも滞つてゐるやうな実情でありながら、どんなもんだいと大得意だったものでした。(以下略)

〔青山二郎文集 増補版〕小澤書店 1995・初出は「藝術新潮」昭和35年8月号

当時の一万円は現在の二千五百万円程度であろうか、中略のところでは代金をどう工面したかが書かれている。そしてこの「良寛書大巻」こそ、御風編『良寛和尚遺墨集』(春陽堂1919)で「大字横巻」と紹介され、

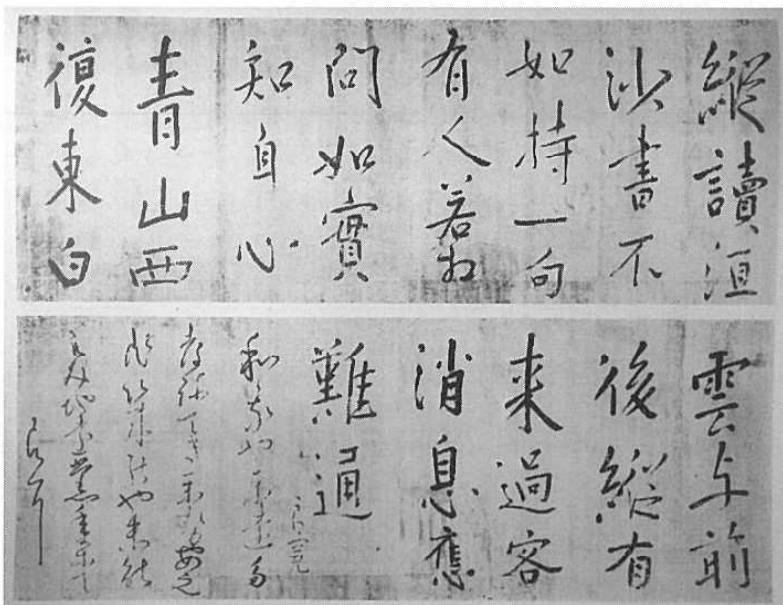
これは嘗て東京で催された良寛会主催の遺墨展覧会に出品されて、最も著しく鑑賞者の眼を驚かしたところの名品である。和尚の遺墨中で最も字の大きく書かれたもの、一つで、殊にそれが楷書である点に於て無類の名品である。

と解説された逸品なのである。

また、御風が序文で「茲に確信を以て『本集をこれこそ完全に近い良寛和尚の遺墨集です』と推薦して憚らない」と記した佐藤吉太郎編『良寛遺墨集』(第一書房 1928)では「詩及和歌 縦読洵沙書」と掲載され、いづれも市川辰雄(加茂)所蔵品としている。

つまり、平安堂に流れてきたこの逸品を、魯山人の1回目の来訪で御風が紹介し、惚れ込んだ魯山人が持ち帰り、2回目の来訪で平安堂に(全部または一部の)代金を支払いに、あわせて御風を訪問し雑誌アトリエの良寛遺墨について談義をし、3回目の来訪では、様々な世話になった御風へのお礼を込めて料理に腕を振るった(このときも平安堂への代金の支払いがあったかもしれない)。—このように考えると自然だ。

新潟大学の角田勝久氏は、魯山人の書の変遷史においてこの大巻の果たした役割の重要性を述べており(北大路魯山人と良寛書《縦読洵沙書》・書字書道史研究 28号 2018掲載)、その意味からも魯山人の糸魚川来訪、そして御風との面談は特別な意味をもっていたといえよう。



縦読洵沙書

佐藤吉太郎編『良寛遺墨集』では右のように上下に分割掲載されている。実物はつなげると縦62.5×横329.4cm

「縦読洵沙書」最近の展示

- ・2017. 9. 29～11. 5 岡山県立美術館 「慈愛の人 良寛—その生涯と書」
- ・2018. 4. 21～5. 27 永青文庫(文京区) 春季展「生涯260年 心のふるさと良寛」
- ・2019. 11. 16～2020. 1. 31 徳川美術館(名古屋) 「良寛没後190年記念 良寛さん—その人と書」

縦読洵沙書 不如持一句 有人若相問 如實知心 青山西復東 白雲乍前後 縱有來過客 消息應難通 良寛 わがやどを たずねてきませ あしびきの やまのも みちを たづねがてらに

令和元年度 事業報告

□御風忌・総会・講話 二十四名参加

・令和元年五月八日 午後二時

会場 相馬御風宅・割烹倉また

講話 岩町 功様(島村抱月研究家)

演題 芸術座の仕事〜抱月、御風、須磨子、晋平と共に

□会報「洗心」第二十九号発行

令和元年五月八日、六百部

□米吉忌 九名参加

・令和元年十一月二十四日 午後六時

会場 正覚寺様

講話 蛭子健治様(御風会理事)

演題 米吉歌碑建立時のこと

□理事会(二回)

・令和元年十月二十一日 午前十時

・令和二年三月十一日 午前十時

□天皇陛下御即位記念、第34回国民文化祭・にいがた2019、第19回全国障害者芸術・文化祭新潟大会「相馬御風顕彰ふるさと俳句大会」への協力

賞品提供 一般の部佳作受賞者へ文房具

令和元年十一月三十日

会場 糸魚川市民会館

### 【最優秀賞作品】

一般の部

早津 翠邦様 (糸魚川市)

葉降るだんだん若くなる遺影

観光俳句の部

猪又 秀子様 (糸魚川市)

ひとつあるハートのリング岩灼くる

児童・生徒の部

内田 光 様 (下早川小学校4年)

はしり梅雨昨日とちがう今日の空

田代 萌花菜様 (糸魚川東中学校2年)

式終えし子ら春風に放たれる

小倉 吹樹様 (海洋高等学校1年)

カーネーション母にわたせず十五年

観光俳句の部では、御風に関する句が多くありました。優秀賞・佳作のなかからご紹介いたします。

菅瀬 陽子様 (新潟市) ※優秀賞

夏の炉や魯山人来て八一来て

司 雪絵様 (三条市) ※以下佳作

「カチューシャ」は母のおはこや御風の忌

小林 忠男様 (長野市)

花柘榴肩にふはりと御風邸

西山 登美枝様 (糸魚川市)

白牡丹御風生家で待ち合わせ

袖山 リエ様 (長岡市)

持て成しの一会の夏炉バタバタ茶

砂田 海光様 (糸魚川市)

御風居の軋む階段梅雨湿り

### お悔み

御風顕彰に長い間ご尽力された会員が他界されました。

心よりご冥福をお祈りいたします。

■田鹿 勝三様 令和元年六月逝去

■松野 功様 令和元年十一月逝去

### 《表紙紹介》

相馬御風筆短歌「この道は」  
紙本墨書・個人蔵

この道は限なき道いきのみの  
生きのかぎりはうたひとほさな 御風

(「木かげ」第五十九号・昭和十二・三より)

昨年八月、九月と私は病臥してゐたが、九月初旬体の気持が少しづつよくなりかけてからこの方、およそ五十日ほどの間に、二百五十首ほどの歌を詠んだ。こんなに永く病み

つづけたことも近來めづらしいが、予後こんなな歌心の旺盛であつたことも近年にないことであつた。

病後の更新した気持が私にかくまで豊かな歌ごころを恵んでくれたとも云へるが、それよりむしろふと私の内部に湧き起つた歌ごころのお蔭で私の健康がめき／＼よくなったのだと云つた方がより自然であるやうだ。かくして歌の功德に対する私の感謝の念は年々に深まつて行くばかりである。

以前云つたことがあるやうに、歌は私にとつては称名念仏のやうなものである。歌を思ひ歌を詠むことによつて私はいかに貴い救ひに預らせて貰つてゐることぞ。それを思ふと、私は歌神に向つて合掌せずにはゐられぬのである。

この道は限なき道いきのみの生きの限り  
はうたひとほさな

これは私の嘗て詠んだ歌であるが、この一念は日々強まるのみである。歌と一如である時のみ私は健やかである。歌から離れる時に私は病むのである。

うたはう！うたはう！

### 【編集・発行】

御風会 (事務局・相馬御風記念館内)

〒九四一・〇〇五六

新潟県糸魚川市一の宮一―二―二

電話番号 〇二五(五五二) 七四七一